

『境目』さかいめ

作者 浅羽 一

その顔は怒っているのか、驚いているのか。それとも、ほんの少しでも哀しんでくれているのだろうか。普段はまるで見られそうにない鉄二てつじの正面に立ったまま、私はもう一度、出来る限り冷たく聞こえるように告げた。

「だから、言ってるじゃない。あんたの事なんて、別にどうでも良いんだって」

鉄二は何も答えない。ただこちらを見つめてくるだけで、何も応えてくれない。そんな現実が無性に切なくて、ほんの一瞬でも気を抜いたら、きっと自分は泣き出してしまうんだらうと分かったから、私はもうとにかくこの状況を一刻も早く終わらせたくて早口に言った。

「ね、分かったでしょ。悪いけど、そろそろ行って良いかな」

返事も待たずに背を向けた。途端、胸の奥から込み上げてくるものがあつたけれど、奥歯と唇に力を入れてやり過ごした。

昼休みの校舎裏、初春の柔らかな気候の中で他に人影はなく、きつとクラスの女友達などからこんなシチュエーションの話が聞かされていた時だったなら、みんなと一緒ににはしやぎながら羨ましがっていたかも知れないけれど、今はとにかく逃げ出したい気持ちで一杯だった。

だけど、それなのに私が歩き出すよりも僅かに早く、鉄二が「待てよ」と言ってきた。決して強い口調ではなく、むしろ簡単に無視してしまえそうなくらい静かな声だったのに、それだけで私の足は持ち主に逆らって動きを止めた。

「ちよっと待てよ。何だよ、それ」

「何って、そのままの意味じゃん」。私は振り返らなかった。

「って言うか、何でお前が切れてんだよ」

「別に、切れてないし」

「だったらその態度は何なんだよ」

「うっさいわね。そんなの、どうだって良いでしょ」

気付いてよと、思った。どうして分からないのよと、叫びたくなった。

代わりに口から出てきたのは、自分でも恐くなるくらい無機的な声だった。「って言うか、あんたも案外しつこいよね」。

背後で、鉄二が息を呑んだのが分かった。頭の中で、彼が浮かべているだろう表情が再現された。泣きたくなるほどの罪悪感が襲ってきて、苦しくて、悲しくて、本当に身勝手な話だろうけれど、どうして私にこんな想いをさせるのよと、いっそ腹が立ってきた。さつさとチャイムが鳴ってくれば良いのにと、生まれて初めて大嫌いな英語の授業の開始を願った。

「…つつーか、こっち向けよ」

押し殺している風な声をぶつけられて、いよいよ手が震えてきた。

もう無理だと確信した。これ以上この場所にいたら、私の心は壊れてしまう。

「だから、言ってるでしょ」

振り向いて、思い切り鉄二を睨んだ。そうでもして目に力を込めていないと、涙が溢れて止まらなくなりそうに恐かった。「正直、今さら告白とかされても、迷惑なんだってば」。

鉄二は、やっぱり私を真っ直ぐに見つめてきていた。こんな時まで話し相手の目をきちんと見つめる生真面目さに、そんな誠実さとは裏腹な相変わらぬ鈍感さに、怒りと呆れ

と、それから仄かな可笑しさが湧いてきて、改めて己の気持ちを自覚した。

「あんたと付き合うとか、マジで無理だから」

今ならまだ間に合うと思つた。だから、今すぐに気付いてよと想つた。私のことを好きだつて言うのなら、私の心もちゃんと理解してよと、鼓動が速くなりすぎて潰れてしまふような胸の中で絶叫した。

それなのに、鉄二は結局、鉄二だった。馬鹿で、鈍感で、そのくせ変に面倒見が良くて、他のどの男子よりも優しい、そんな人間だった。

「……ごめん、悪かつたよ」

期待とはかけ離れていて、それなのにあつさりと思出来ていた言葉に加えて、深々と頭まで下げられて、気付けば私は駆け出していた。再び上げられた顔とまともに向き合える自信なんて欠片もなかつた。ましてや、そんな自分の姿をもう彼に見られたくなかつた。

私は、泣かなかつた。ようやく鳴り響いた予鈴の中、教室に辿り着いてからも、泣かなかつた。むしろ、隣の席から「何の話だったの」と気遣わしげに尋ねてくる希美のぞみに対して、笑いかけてさえた。

「別に、大した事じゃないよ」

「でもー」

「本当だつてば」

「…だつたら、良いんだけど」

「ほらほら、それよりも授業の準備でもしときなさいって」
こちらの返答を完璧には信じていないようで、だけど同時にかすかに安堵してもいそうな希美に笑顔を向けながら、絶対にまだ泣けないと、吐き気を無理矢理に胸の奥に閉じ込めてみるみたいな心地で思っていた。

「…ねえ、沙耶さや。本当に、大丈夫？」

「大丈夫も何も、別にどうもしてないってば」

お願いだから気付いてよと、胸の隅っこで情けなく泣いている自分には、とりあえず苦手な英語の教科書で蓋をした。

目が覚めると、そこは何だかとにかく白かつた。

例えば空は、一面が雲で覆われているみたいに真っ白で、それなのに辺りは夏の晴れた昼下がりがさながらに明るかつた。材質のよく分からない地面にしたって、一からペンキで隅々まで塗つたと言うよりも、元の大地からあらゆる色素を残らず抜き取つたと言われた方がしっくり来そうな純白さで、そこはまた微少な影さえ見つかからないほどに何処までも何処までも平坦だつた。

そして私はその、あまりにも単一すぎて、最早、広いのか狭いのかさえ判然としない世界の中で、一人ぽつんと立っていた。自身の姿と、着ている半袖のセーラー服だけがいつもと変わらない色合いをしていて、なのに足は靴も靴下も穿いていなくて、色んな意味で

とても違和感があつた。

「：お〜い」

おずおずと声を上げてみるが、案の定、誰からも返事は無かつた。そこでもう一度、今度はどうせ誰もいないのだろうからと少しだけ大きめの声で「あ〜」と言ってみるが、やはり世界はひたすら静かなばかりで、我ながら改めて顧みれば滑稽な行動だったと、余計に気恥ずかしくなつただけだった。

さて、どうしようかと、私は頭を巡らせた。けれど、結論はその必要もなくすぐさま頭に浮かんできた。詰まる所、考えた所で何が分かるわけもなく、だとすればとりあえず歩いてみようとした。

見渡す限り無人の世界を、私はぺたぺたと裸足で進んだ。時折、「誰かいませんか〜」とさして期待せずに言つたりしつつ、ひたすら直進出来ているのかどうかも定かでないまま歩き続けた。足の裏から伝わってくる地面の感触は、強いて言うならばぴかぴかに磨かれた後の体育館の床みたいだった。

不思議と恐怖は感じていなかった。それよりも単純に、此処は何処なのだろうという、おそろく冷静に考えれば酷く間抜けな疑問ばかりが気になつていた。どれだけ歩いてもう一向に視界の変化は無かつたものの、疲れもまるで感じなかつたから、いつしか時間の感覚までも曖昧になつていた。

だけど、さらに歩き続け、いよいよ次の行動を選択し直した方が賢明なのではなからうかと、今さらながらに思い始めていた、まさにその頃だった。

「おやおや、珍しい。久しぶりのお客さんだ」

突然、すぐ傍から声が聞こえて、私は思わず小さな悲鳴を上げた。

果たして、いつの間に現れていたのでろうか、私からほんの二メートルほどしか離れていない場所に、これまで見たこともないほどに奇妙な出で立ちの男―声や体型からして、そうだと思う―が立つていた。

「これは失礼、驚かせてしまったかな」

「あ、いや〜」。慇懃な仕草で頭を垂れる男を前に、私は何と返して良いのか分からなかつた。

本当に、奇妙な男だった。派手さはないが、見るからに仕立ての良さそうなスーツ姿で、艶やかな革靴を履き、背の高いシルクハットに加えて、白い手袋をはめた手にはいかにも高級そうなステッキまで持つている。だが、真に可笑しいのは、そんな紳士然とした格好では決してなく、何よりもその顔だった。

端的に言つて、男には顔がなかつた。ただ、西洋の怪談話に出てくる騎士みたいに、頭がないわけではなかつた。現に、帽子まで被つてゐるのだし。とは言え、日本の妖怪にもいる「のっぺらぼう」などとも、また少し違つた。

どんな表現が最適なのか、私はようやく落ち着きつつある心臓の動きを確かめながら、密かに考えた。

そして思い付く。要するに、男は首から上の、丁度顔の部分にだけ、プライバシー保護の為のぼかしを入れられてゐる様な感じなのだ。そう、それはさながら、ワイドショーなどの取材を受けて証言をしている「会社員のAさん」や「元空き巢のBさん」と言つた人物のごとく。

私は正直、怖がるべきなのか呆れるべきなのか、すぐさま選ぶことが出来なかった。勿論、生物的な違和感というか、生理的な不快感は紛れもなくあったのだけれど、同時にそのある意味で人を食った姿が、何となく皮肉っぽく感じられてもいたせいだろう。不意に、生徒が失敗した時など、こちらが分からないのの良いことに、やけに流暢な英語でぼそりと何言かを呟く、嫌味な英語教師の顔が浮かんできた。

私は僅かに考えてから、「あんた、一体、何？」と聞いた。「誰？」と尋ねるよりも合っている気がしたからだ。

だけど、男はむかつくことに、軽く肩をすくめて見ただけだった。まるで、理解の遅い生徒を相手にするのは面倒だとしても言わんばかりに。ぼんやりとしていて断定は出来なけれど、きつとこいつは今、顔に薄ら笑いを浮かべていると直感した。

「果たして、ようこそと言って良いのかどうなのか、少しばかり悩む所ではあるがね。とにもかくにも、此処は俗に『境目』と呼ばれている」

こちらの質問を無視していきなりそんな説明を始めた男に、ついつい反発しそうになるのを堪えるのに苦労した。

「境目？」、そうして私は、何とか素直に話を受け入れている風を装う。

「ああ。とは言え、他の呼び方をしたければ、こちらとしては一向に構わないがね」

「別に、そんなのどうでも良いし」

「ふむ。何事に対してもあまり感心を抱けないと言うのは、若者として少なからず勿体ない生き方であったと思うがね」

気取った物言いに今度こそ思い切り文句でも言ってやりたくなくなったが、しかし寸前で私は奇妙な違和感に気付く。確かに今、この男は私に対して過去形を使った。

「：今の、どういう意味？」

やっぱり、これもまたどうでも良いことであるのかも知れない。けれど、どうしてなのだろうか、強いて理由を挙げるなら本能的に、それは聞き流して良い単語でないと感じたのだ。

「と言うと？」。きつと全てを分かっているくせに、男はとぼけた口調で続きを促してくる。

私は懸命に己を抑えつつ、問うた。「生き方だった、って、どういう意味よ」。

男は、さも愉快そうに、そのくせ表面上はそんな感情を誤魔化そうとでもしているかのごとく、とても短く「ああ」と頷いただけだった。でも、それはつまり、私の悪い考えを正しいと認めている態度だとも言えた。

馬鹿馬鹿しいと一笑に付すことは、出来なかった。自分でも不思議なことに、私はこの手抜きの舞台みたいな現状に、憤りを抱きながらも、心の何処かで納得してしまっていたのだ。もしかしたら、それこそが、眼前の奇妙な男の持つ力であったのかも知れない。こんな不条理な生き物がいると言うことは、要するに、まともな存在が生きていられる世界では決して無いのだと、強制的に意識へと擦り込むのだ。

そして私は、遅まきながら、恐怖した。辛うじて泣くことはしなかったけれど、一人だつたら号泣しながら取り乱していただろう。寒くもないのに、両腕の肌は粟立ち、両足が小刻みに震えてきた。

「まあまあ、そんなに悲観する必要もないさ」

言葉だけ聞けば慰めてくれているようであったけれど、男の口調は明らかにこちらの感情に対して無頓着な本音を表していた。

「どんな人間であれ、生きている限りはいつか必ず死ぬのだからね」

「だからって、いつ死んでも良いわけじゃないわよっ」

気付けば大声を上げて、何処にあるのかも定かでない、そもそもあるのかどうかすら疑わしい男の目を、私は思い切り睨み付けていた。

「ただ、返ってきた男の反応は、あからさまに冷めたものだった。「本当に？」」。

あまりと言えば淡々とした問いかけに、私は思わず言葉を失った。

「君は、本当に生き続けていたかったのかい」

当たり前でしょ、と即答した、つもりだったけれど、足の震えが喉にまで伝染してしまっていたのか、出せた声は単語の形も取れない音でしかなかった。

男が笑ったのが、分かった。

「さてさて、どうしたものかな」

やがて男はいよいよ上機嫌になってきたのか、ステッキを手首に引っかけてくるくると回しながら、まるで品定めでもしているみたいに私の周りを歩き始めた。ただし、顔だけは常にこちらへ向けたままで。

私は正直、いつ襲いかかられるのだろうかと不安になりつつも、可能な限りそんな弱気を隠し、男の動きに合わせて体の向きを変えていた。何度か、そのふざけた仮面じみたぼやけ顔の実体を確かめてやろうと目を凝らしてもみただけで、全く度の合っていない眼鏡を掛けた時に似た不快な圧迫感を抱くばかりで、結局、成果は上げられなかった。

「…あんたって、死に神とかなの」

それからしばらくして、もう何週目になるのも分からなくなった頃。男の仕業か、それとも単に目が回っただけなのか、いい加減に気分が悪くなってきた私は、遂に動きを止めて、そう問うた。

私の丁度真後ろにいたはずの男は、しかし一瞬の間に眼前に現れると、ステッキの持ち手でシルクハットの鍔を軽く叩いて、「さあ、何だったかな」とどぼけて見せた。

おそらく、その気障ったらしい態度が私に限界を迎えさせた。

「ふざけないでよ」

いつしか、私の中で驚怖よりも憤懣の方が大きくなっていった。

「ふざけてなどいないさ」

「だったら、さつきも聞いたけど、あんたは一体、何なのよ」

「何と言われてもねえ」

「死に神じゃないのなら、悪魔？まさか、天使だなんて言わないわよね」

「どうして、私が天使と名乗ったらいけないんだい」

「あんたみたいな気色悪い奴が、天使なわけないじゃない」

一瞬、男からの返答が途切れた。

私は突然の沈黙に、僅かばかり怯みそうになったけれど、後悔はしなかった。

ややあって男は軽く肩をすくめてから、「何なりと、好きなように」と言った。その、ともすれば笑いを堪えている風にも聞こえる声に、男の沈黙の原因が怒りでなく、ただ単にこちらの反応を意外に感じたただけだったのだらうと悟った。詰まる所、この男にとって

の私なんて、反応を面白がる為の玩具の人形くらいにしか価値がないのだ。

「私の呼び名など、それを口にする人間によって幾らでも変わるのだよ」

「どういう事よ」

「天使でも悪魔でも、神でも仏でも、何なら精霊でも幽霊でも。こちらとしては、宗教や好みによって呼びたいように呼んでくれて一向に構わない。それで私自身の存在理由と成すべき事が変わるわけもないからね」

「ずいぶん適当なのね」

「ちなみに、以前にここを訪れたヨーロッパの哲学者は、私の事を『自らの潜在意識が投影された存在』だとも言っていたがね。そう考えると、つまり私は君の真の姿と言うことになる」

「馬鹿じゃない、そんなの絶対に」有り得ないから、と続けようとして、私はふと重大な事実気付いた。

「：ちよつと待つて。此処って、他にも人が来たりするのよね。その、死んだ人が」

男は「今さら何を言っているんだ」とでも言いたげに、わざとらしい溜息を吐いただけだった。

「でも、だったら変じゃない」

「例えばどの辺りが」

「だって、世界中で一秒間に死んでいる人間の数って、もの凄いでしょ。前にテレビで見たもの」

「その通りだね」

「なのに、私の他には誰もいないじゃない」

「見れば分かるね」

「ふざけないでよっ」

「だから最初に言っただろうに。此処は『境目』だと」
「：何よそれ」

出来損ないの言葉遊びめいた問答に早くも嫌気が差してきて、私はとにかく少しでも事態を把握したくて頭を巡らし……直後に、この時に至るまであまりにも重要な事柄を見落としていた己に愕然とした。

自分は一体、どうして死んだのか。

忘れていた恐怖感が、先ほどよりも遙かに強烈に襲いかかってきた。

私は耳を塞いで、目を瞑って、その場にしゃがみ込んだ。気を抜けば、すぐにでも思い出してしまいそうな気がしたからだ。改めて自身の死を意識するなんて、絶対にごめんだった。

だけど、それなのに、その声は容赦なく私の上から、いや、いつそ鼓膜の内側から響いてきた。

「君はね、学校からの帰り道、赤信号を無視して交差点に飛び出した所を、走ってきたトラックに撥ねられんだよ」

許可した覚えもないのに、真っ暗な視界に紳士の格好をした道化が無遠慮に浮かんでくる。私は思わず「止めて」と懇願したが、それは無慈悲にも聞き届けられなかった。

「運転手が慌てて急ブレーキを踏んだものの、間に合わなくてね。君は車体にまともにもぶ

つかって、体中をアスファルトに削られながら路上を滑っていったんだよ」

「止めてってばっ」

必死の叫びも虚しく、私の中にその時の映像が、それもまるで誰かが端から眺めていたみたいに全てを目の当たりにしている光景が、コマ送りのような緩慢さで流れていく。

「服もスカートも破れて、カバンや靴もどこかに飛んでいったね。おやおや、せっかくの美人も、自慢の黒髪も、全部剥がれて台無しだ。ああ、見てご覧、肘から骨の先が出てしまっているよ。足もおかしな方を向いているし。せめて冬服やジャージ姿だったなら、もう少しマシな見た目だったかも知れないね」

目を背けようにも、すでに両目をきつく閉じている体ではそれも叶わず。猛烈に込み上げる嘔吐感はあるのに、何者かに胃の入り口を無理矢理に掴まれ塞がれているみたい感覚がして、私は吐いて楽になることさえ出来なかった。

「何ともはや、色んな意味で衝撃的だ」

「…お願いだから、もう止めてよ」

いつしか、私は耳から手を離し、代わりに塞いだ瞼の上から両目を覆っていた、それも強く。肌や骨にまで食い込む爪を感じて、このまま眼球をめぐり取ってしまえば、この光景も消えてくれるのだろうかと半ば真剣に考えた。だけど結局、私の手は涙でべたべたになるばかりで、自分にはそんな勇気も覚悟も無いのだと否応なしに思い知らされただけだった。

「しかしまあ」

と、そこで不意に男がつまらなさそうに呟いたかと思うと、同時に映像が途切れて、私の視界は再び真っ暗になった。

やがて聞こえてきたのは、傍観者の冷徹な指摘だった。

「自殺なのか、事故なのか。いずれにせよ、トラックの運転手は気の毒だったねえ。事実がどうあれ、女子高生を轢いたとあっては、世間の目も厳しくなるだろうから。いやはや、まだまだ働き盛りの若者だったのに、残酷な話だ。いっそ、彼の方こそ自殺してしまうんじゃないだろうか」

私は何も応えられなかった。実を言えば、その運転手に申し訳ないと感じる余裕さえなかった。胸の中には、誰よりも可哀想なのは私自身だと言う想いばかりが渦巻いていた。しばらくの間、私は震えて泣く以外、何も出来なかった。泣けば全てが許されるなんて、そんな都合の良い展開を期待していたつもりは無かったけれど、心の一番底にあるだろう本音の部分では一体どうだったのだろうか。正直、私自身にも分からなかった。ただ、今も眼前に立ってこちらを見下ろしているだろう男にならば、お見通しなのかも知れなかった。

「さて、じゃあそろそろ本題に入ろうか」

再び耳へと届いてきた男の声は、やはり何処か軽薄そうなものだった。

「…：本題って、何よ」

身の毛立つ映像から解放されたからか、それとも男の態度が緊張感を削ぐものだったせいか、はたまた単に泣き疲れてきただけなのか、自分でも完璧には理解せぬままに、気付けば私はふらふらとした感じながらも立ち上がっていた。

「私にはね、君をいたぶろうなんてつもりは毛頭無いんだよ」

男はそんな事をうそぶくと、不信感と嫌悪感で一杯の私に対して、気安い口調で「審査を始めようか」。

「：審査？」。予想していなかった単語に、舌が勝手に聞き返してしまう。

すると男は改めて「審査だよ」と頷いてから、「君が完全に死ぬかどうかを決める為のね」と言った。「最初に話しただろう、ここは『境目』だ。ちなみに、君の肉体は今、病院の手術代の上にある。とは言え、このままでは時間の問題だろうがね」。

最初、何を告げられているのか、脳みその理解が追いついていなかった。だからきつと、私は馬鹿みたいに口をぽかんと開いたまま、決った空間に磨りガラスをはめ込んだみたいな男の顔を凝視していたはずだ。

ようやく我に返ったのは、男があからさまに呆れていると言う感じで溜息を吐いた時だった。

私は意識するよりも先に口走っていた。「私、生き返れるのっ？」。

男の返答は、やはりと言うべきか、つまらなさそうな「さあね」。

「さあって：」

「私は審査をするだけだからね。君のその後の成り行きは、結果を見てみないと」

「：何よ、それ」。あまりと言えば関心の薄そうな態度に、自分の存在そのものを全否定されている様な気がして、束の間の喜びも刹那で霧散した。それに、相手の言葉が偽りでないと保証してくれる要素なんて微塵も無かったし。むしろ、傍観者を装った小狡い悪魔が、成仏出来ずに彷徨っている魂を言葉巧みに騙して喰らおうとしていると考えた方が、まだ真実味がありそうだった。

「審査と言っても、簡単な内容だよ。要するに、君の過去と、ここに来るに至った経緯を検証しつつ、後は幾つかの質問に答えて貰うだけだから」

「質問って、どんなのよ」

決して油断してはならないと、右の後頭部辺りから発せられる冷静な己の警告に従って、自然とこちらの声も硬くなる。勿論、男は欠片も意に介していなさそうだったけれど。

「それはまあ、おいおい尋ねていくとして。それよりも何よりも、まずはこちらの話を聞いて貰えるかな」

「：良いわよ」

「ありがたい。とは言え、単純な話さ。詰まる所、審査の目的は、君の価値を判断する事」

「私の、価値？」

「ああ。君が、わざわざ生き返らせるに値する人間なのかどうか、その価値を見極めるんだよ。だって、考えてもみたまえ。生きるに値しない人間など、このまま死なせた方が良いじゃないか、世界にとつても、本人にとつてもね」

そして男は「そうだと」と、こちらの反応を窺う風に聞いてくる。

私は、喉を詰まらせながらも反射的に、「そんなの、そんなのどうやって決めるのよっ」。心の中では、たかが十七年ちよっとしか生きていない上に、ろくに成績だって良くない自分、そんな大層な価値があるだなんて到底信じられない現実には怯えていた。

「だから言っているじゃないか、審査をして決めるんだと」

「ふざけないでよ偉そうに。って言うか、私の価値を、あんた達が勝手に決めるんじゃないわよっ」

「そんなに強がって不安を誤魔化す必要は無いよ」

「そんなんじゃない」

「あのね、君。良いかい、今さら君が大声を出した所でね、結果に差が出るわけも無いんだよ」

「……………」

丁寧な口調で、けれど有無を言わせぬ迫力を持って告げられて、途端に私はもう何も返せなくなってしまった。

すると男は、大人しくなったこちらに満足したのか、「それにね、君が考えている『価値』と、こちらが言う『価値』は、根本的に異なるからね」と、ともすれば慰めにも聞こえそうな事を言ってきた。だからといって、実際に心が軽くなったりなんてしなかったけれど。

「此処に来る者はね、君を含め、曖昧な人間だけなんだよ」

「…曖昧な人間？」

「例えば君は、自殺と事故、一体どちらが原因だったのか」

「それは…」

私は答えなかった。と言うよりも、私にだって分からなかったのだ。無理矢理に見せられた映像はともかく、あの瞬間に関する自分自身としての具体的な記憶や感情は、トラックにぶつかった衝撃で体から遙か彼方へと飛んで行ってしまったみたいに、消えていた。「まあ、自殺だとはつきりしていたなら、そもそも此処には来られていなかっただろうし。そしてそれはまた逆も然りで、避けようの無い事故ですでに明確に即死していたならば、やはり同じ事だっただろうがね」

「……………」

「そう考えると、此処に来るのは『ぎりぎり幸運だった人間』だとも言えるだろうね。今にも死に直面している事実は不運だとしても、辛うじて審査を受けられる分、悲惨な事故の被害者よりはまだマシだ」

「どうして、自殺なら、駄目なのよ」

ふと胸に湧いたその問いに対する男の返事は簡潔だった。「自ら命を手放す者に、改めて生き返る価値は無いだろう」。

「何だよ。その人だって、生きてさえいれば、もしかしたら将来に凄い発明をしたり、何か特別な仕事とかをして世界的に有名になるかも知れないじゃない」

「我々が言う所の『価値』とは、君達の世界にとってどれほど重要かと言う意味とは、全く違うんだよ」

「え…」

「此処で審査する『価値』とはつまり、『世界の中での重要度』ではなく、『生命としての在り方』なのだよ。有名も無名も、優秀も無能も、人間の本质には関係ない」

「……………」

「此処では、強国の大統領も、平凡な女子高生も、歴史的な科学者も、生まれたばかりの赤ん坊も、皆同列なのだよ」

それは、少なからず意外な言葉だった。まさか、教科書に載っていきそうな人物と、その名前を覚えるのに四苦八苦している自分が同じに扱われるだなんて、夢にも思っていないか

った。

「安心したかな」

「別に、そんな事は――」

「しかし、それはまだ少し早い」と、男は思わず否定しようとしていた私をあっさり無視して、こう続けた。「最初にこんな事を言うのは酷かも知れないが。君の場合、あまり状況はよろしくないからね」。

口から飛び出そうとしていた言葉が引っ込み、気管に詰まってむせそうになった。

「そ、それって、どういう意味よ」。我知らず震える喉を使って、何とかそう尋ねると、男は平然と審査の方法を説明してきた。

「審査は、減点方式で行われる。なぜなら、生まれてきた時点では誰しも皆、等しく価値ある命なのだからね。問題は、その後の生き方でどうなっていたかだ。そしてこの減点の基準だが、端的に言えば、『嘘』で決まる」

「…嘘？それって、どれだけ嘘を吐いてきたか、とか」

「その通り。もっと正確に言えば、どんな嘘を吐いてきたか、だがね」

「そんなの」絶対に無理じゃないと、何とか途中で口を閉ざしたものの、心底から思った。今までに吐いた嘘の数や中身なんて、とてもじゃないが覚えていない。

けれど男は、早くも絶望に沈みそうになっている私に、平坦な声で告げてきた。「断っておくがね、嘘がすべからくいけないと言っているわけではないよ」。

それでは一体、何が許される嘘で、何が許されない嘘なのだろうか。混乱しつつある私に、男はいかにも「お前の考えなどお見通しだ」とばかりに、ステッキを二回ほどくるくるとさせてから、「最も厳しく減点されるのは、『自分を騙す嘘』と『他者を傷つける嘘』だね」。

「…自分を、騙す」

「おや、身に覚えがありそうだね」

「そんなこと…」

「他者を害する嘘は言うまでもないけれど、ある意味で己に吐く嘘こそ何より厄介だと言えるね。どうしてだか、分かるかい」

「…知らないわよ」

「自己否定だからだよ」

「……………」

「自殺と一緒さ。自らの意思で体を殺す代わりに、心を殺すのだから。自身を守る為に吐く嘘でなく、自分こそを騙してしまう嘘など、それはつまり己の生き方と価値を否定している事と同じだろう。そんな真似を平然と行う人間を、どうして後押ししなければならぬんだい」

男は気楽な口調で辛辣な言葉を終えると、呆然とするこちらに向かって「さて、それでは審査を始めようか」と告げてきた。私は、誰も好きこのんで自分に嘘なんて吐かないのだと、言いたかったけれど、実際は一声も返せなかった。

「君はなかなかしつかり者として生きてきたようだね」

そう言いながら男が軽くステッキを振ると、あたかもホームシアターのスクリーンを宙に貼り付けたかのごとく、いきなり目の前の空間に無音の映像が流れ始めた。それはまさ

しく、私の過去を幼い頃から順に早回しで映し出しているものだった。

猿みたいな顔で離乳食を口一杯に頬張っている、現在の自分とは似ても似つかないようで、しかし仄かに面影も見て取れそうな、赤ん坊の私。幼稚園に進んで、真新しい制服と帽子を何度も何度も両親に見せつけている、ちよつとだけおませな私。地元の小学校の五年生になり、クラスの学級委員長に選ばれて、かすかに体を強ばらせながらも教室の前に立って頑張って挨拶をしている私。次から次へと流れていく光景は、こんな状況にもかかわらず、不思議な懐かしさと奇妙なおかしさを感じさせてくれるものだった。

だけど、続いて場面が切り替わった時、私は密かに息を呑んだ。六年生の夏休み明け、やはり学級委員を務める私のクラスに、転校生がやってきた日の光景が再現されていたからだ。

みんなよりも先に、職員室で担任の女性教師から「沙耶ちゃんは学級委員だから、この子をよろしくね」と紹介された時、希美は見るからに緊張した面持ちで上目遣いにこちらを見つめてきていた。

あの日の事は、今でも覚えている。職員室から出た後、教師から任された責任感で、とにかく彼女を早くクラスに溶け込ませなければと考えていた私が、出来る限り愛想の良い笑顔で「よろしくね」と言うと、あろう事か希美は突如として申し訳なさそうな表情を浮かべたのだ。

「ごめんなさい。私なんかの為に、わざわざ」

そう言っただけを下げたきた同い年の少女に対して、私は驚きと、僅かな焦りと、それら以上に新鮮さを抱いたのだ。希美の行動が単なる嫌味で無いことは、その顔を見れば子供の頭でもちゃんと分かった。

「そんなことないよ。だって、これから同じクラスになるんだし」。慌ててそう言い返しながら、きつとこの子は人見知りする子なんだろうなと思っていた。だとすれば、いよいよ自分が助けて上げなければいけないな、とも。

「ずいぶんと仲が良さそうだね」

改めて笑いかけた私に、ようやくかすかだが微笑み返してくれた希美の姿を眺めていると、男がそんなことを言ってきた。

「あの子は、私がいないと駄目な子だから」。私は、懐かしい希美の姿を見つめたまま、即答した。

事実、希美は何かにつけ、周りの人間達よりもとろかった。だからその度に、私は彼女の手助けをした。ただ、それを面倒だとか、嫌だと思っただけで、確かに全くと言っていいほど無かったのだ。そして希美もまた、私以外の人間に頼ろうとはしなかった。

「なるほど。彼女にとって、君はとても大切な存在だったわけだ」

「私にとっても、希美は大事な友達よ」

自分で言うのも照れ臭いが、いっしょか私達はとても仲の良い姉妹みたいな関係になっていた。

それなのに、次に男が吐き出した言葉は、そんな私達に対する皮肉じみた内容だった。

「でも、本当に君は彼女の事を想っていたのかな」

「もしかして、それが嘘だって言うつもり？」

すぐさま問い返した私に、男は何も答えてこなかった。

私は思わず男へときつい視線を向けて、「ふざけないでよ。私は本当に、希美の事を――」
「ほら、場面が変わるよ」

だけどこちらが言い終えるのを待つどころか、気にした風もなく、男はステッキで映像を指してきた。

私は釈然としない気持ちを抱きつつも、同時にどうせ争っても無駄なんだと悟り、渋々ながらも再び映像へと意識を戻した。

それはいつの間にか、私達の中学時代へと変わっていた。

鉄二が、いた。

「なかなかいい男じゃないか」

傍らから届いてくる声に、私は複雑な心境で無言を貫いていた。

部活も終わった放課後の校庭では、女子ソフトボール部のキャプテンを務めていた私と、マネージャーをしてくれていた希美、それから野球部のピッチャーをしていた鉄二が、汚れた体操服やユニフォームを着替えもせずに、楽しげな様子で言葉を交わし合っていた。

音声が無くとも、容易く分かる。鉄二が何かしら下らない冗談を言っただけで、「馬鹿じゃないの」とか何とか返し、希美がそんな私達を眺めて笑っている。中学三年生のあの頃、徐々に子供扱いされる事に嫌気が差し、大人を意識し始めた私達だったけれど、不思議と三人で過ごしている時は、子供とか大人とか、そんな余計な事なんて考えたりしなかった。馬鹿馬鹿しいやりとりが、ただ楽しい。本当に、それだけで十分だった。

私達の関係は、それから三人共に同じ地元の公立高校へと進学してからも、変わらなかった。少なくとも、表面上は。

私は高校入学を機に、部活を止めた。高校にソフトボール部が無かった事が理由と言うよりも、元々、キャプテンだから続けていたと言う意識が強かっただけのものだし、何より日に焼けたくなかったからだ。言うまでもなく、希美も部活に入ったりしなかった。

ただ、鉄二だけは野球を続けるものとはばかり思っていた。運動神経は良いし、ピッチャーとしての実力だって悪くなく、現に入学当初は先輩達から勧誘もされていたのだから。でも、どうしてなのか、彼もまた私達と同じく帰宅部を選んだ。

私は、正直な所、それを少なからず勿体ないと思いつつも、中学時代と同様に三人一緒に帰れる放課後が楽しくて、一度も彼に部活を勧めたりしなかった。

「君は、彼のことを好きだったんだね」

改めて直球で聞かれて、涙の乾いた頬が一気に熱くなった。

「それは……」違う、はずだった。

だって、私にとって鉄二は単なる仲の良い友達でしかなかった。異性として好きとか、嫌いとか、そんな面倒でややこしい感情を抱いたりなんて、そんなことは決して――。

「答えてくれないと、進まないよ？」

こちらの思考を寸断するように発せられた言葉に、思わず息を呑んだ私は、ややあつて結局、こんな答を返してしまった。「……うん、好きだった」と。

嘘を吐くことによって生き返れなくなることを恐れたと言うよりも、今さら誤魔化したただけなのかも知れない、この想いについてだけは。

「だったら、一体どうして、彼の告白を受け入れなかったんだい」

そしていよいよ、場面がその時の光景へと変わった。

私は、ご丁寧なことに、わざわざ一時停止をしてくれているみたい、衣替え前の格好をしている自分と鉄二が向き合って静止している様子を眺めながら、本当にこいつは最低な奴だと確信した。

「：どうせ、全部知ってるんでしょ」

「君は、こちらの質問に答えれば良いんだよ」

「何が質問よ。人の気持ちを面白半分詮索してるだけじゃない」

「だったら、審査を放棄するかい？」

心の底から、ふざけた顔をぶん殴ってやりたくなかった、それもグーで。だけど詰まる所、私に許された選択肢など一つしかなかったのだ。

死への恐怖とはまるで異なる苦しさに、また涙を溢れさせそうになりながらも、私は必死にそれを堪えて、思い切り男を睨み付けた。これで泣いてしまうのは、絶対に嫌だった。

「：希美が、鉄二を好きだったからよ」。心臓が絞られるような痛みを実際に感じたけれど、手の平に爪を食い込ませて紛らわした。

男は至って満足そうに「そうかい」とシルクハットを上下に揺らしてから、しかし一転して今度はやや静かな口調になって、「全く、困った嘘を吐いたものだね」と言った。

「どういう意味よ」

「そのままだよ。ただでさえ厄介な二種類の嘘を、見事に融合させてしまっているんだから」

「ちよつと待ってよ。どうして、そうなるのよ。確かに、私は自分の気持ちに嘘を吐いたかも知れないけど、それは誰かを傷つけたかったからじゃないわよ」

「でも、彼は傷ついたよ？」

「そんなのっ：。そんなの、どうしようもないじゃない。って言うか、それじゃあ本当に好きでも無い相手から告白された人間はどうなるのよ。『他に好きな人がいるから付き合えません』って言って断ったら、みんな罪なわけ？」

「まあ、君の言うことも一理あるね」

「だったら」

「問題は、傷つけたのは彼だけじゃないと言うことさ」

こちらの言葉を寸断して告げられた、予想外の内容に、私は「：え」と声を失ってしまった。こいつは一体、誰の話をしているのだろうか。

すると男はそんな私の戸惑いさえも嘲るかのごとく、酷く冷たい声で「君は本当に心から、こんな嘘で友達を幸せに出来ると考えていたのか」。

私は、答えられなかった。すぐにも頷きたかったのに、何故だかそれをさせない気配が周囲に満ちていた。

男が「見なさい」と、宙に浮かせたステッキの先を、目に見えない何かをどけるみたいに横へ振った。

私は、信じられない気持ちで一杯で、束の間、息を吐くことすらも出来なかった。

場面の時刻はそのまま、カメラを僅かに横へと移動させた風に変化した画面の中には、紛れもなく希美が映っていた。

今にも泣き出しそうな顔で、校舎の影から私達を覗いている希美の姿に、私は鈍器で思

い切り後頭部を打ち付けられたような感覚を味わった。

「あの子、あそこにいたんだ……」

「みたいだね」

「けど、だったら、何で」

私はあの日、教室に戻ってから見た希美の様子を思い出そうとする。

けれど、それよりも早く、男が冷静な口調で「彼女もまた、必死だったんだろう」と言ってきた。

「……何よ、それ」

「卑怯だと思ukai」

「それは……」

「実際問題、彼女はこの二ヶ月後、彼と付き合うことになるのだしね」

「……」

「だけど、果たしてそれで本当に彼女たちは幸せになれたのか」

それから男は呆然と立ち尽くすことしかできない私を気に掛ける素振りさえ見せず、「では、それを確かめてみよう」と言った。

「この先は、君の知らない現実だ。なぜなら、君が街で仲睦まじく並んで歩く二人の姿を目にして、直後に路上に飛び出した、その後からの出来事なのだから」

そして場面は次のチャプターへと飛び越えたみたいに、別のものへと切り替わる。

その場所を具体的に特定することは出来ずとも、そこが間違いなく病院だと分かる、そんな雰囲気を満たされた建物の中、リノリウム張りの廊下の片隅で、私服姿の希美が化粧の崩れた顔をさらにどろどろにして泣いていた。傍らには、あの告白を断った時でさえ見られなかったくらい厳しい顔つきの鉄二が、やはり私服で立っていた。

二人とも、私がああに見つけた格好のままだと、ようやく思い至った。

「声を聞ukai?」。男はそう言うやいなや、こちらの返答も待たずに頭上に掲げた指を鳴らした。

直後、本来の時間で再生される場面に合わせて、どこからともなく希美の嗚咽が聞こえてきた。

『……私の、せいだ』

泣き声に混じって一番最初に耳に飛び込んできたのは、そんな言葉だった。

私は肺と心臓を両手で力任せに握りつぶされているような気がした。

『止せよ、そんなこと言うの』。慰めようとする鉄二もまた、疲れ切っていて痛々しかった。そんな声、これまでに一度も、真夏の野球部の練習で完全にへばっている時ですら、聞いたことがなかった。

希美はまたしても、『私のせいだ』と言った。

『だから、止めるって』と、鉄二が苛立ちをぎりぎり堪えていると言う感じで再び告げたけれど、希美に従う気配はなかった。

『だって、そうだもん』

『何でだよ。事故の責任なんか、お前に無いだろ』

『事故じゃないよ、きつと』

鉄二の言葉の合間に、するりと滑り込むように紡がれた希美の淡々とした声音に、正直、

ぞっとした。現に、鉄二もまた、声を失っていた。

やや間を置いてから希美は呟いた、『私、知ってるんだよ』と。表情と声音がまるで一致しない、気味の悪さがそこにあった。

『：何を、だよ』。心なしか、鉄二の問いかけは震えていた。真の理由は分からない。しかし、それでも確かに、彼が希美の告白に付き合おうとしている事は明らかだった。

希美はいつしか、頬の筋肉が痙攣しているみたいに、奇怪に口元を引きつらせた顔をしていた。笑いたくて笑っているのでは決してなく、いっそ自分に許された「笑み」なんてそんな醜い形でしかないのだと、無理矢理に思い込もうとしている風な仕草にも感じられた。

『沙耶、本当は鉄二が好きだったんだよ』

その瞬間、画面の外と中で、私と鉄二の肩が綺麗に揃って跳ねた。

『それで、鉄二も本当は沙耶が好きだった』

『お前、何を言ってる…』

『知ってるんだよ、私。だって、全部見てたんだもの。だからもう、隠してくれなくても良いよ』

『……………』

『それにね、私は、本当はもつと前から気付いていたの。沙耶の気持ちも、鉄二の気持ちも。ずっと傍で二人を眺めてきたんだもの、もしかしたら、二人がちゃんと自覚するよりも先に気付いてた』

『：希美』

『でもね、同時に、自分の気持ちと、それから沙耶がそれに気付いてくれているんだって事も、分かった。：だから私は、甘えたの』

と、そこで不意に希美が顔を上げた。その目は鉄二を見ておらず、おそらくは特に意味もなく虚空へ視線を向けただけなのだろうけれど、私はその動作がまるで覗き見をしているこちらを見つけようとしている風にも思えて、反射的に目を閉じてしまいそうになった。

だけど寸前で、男の言葉が脳裏に蘇り、私は辛うじて耐えられた。鼓膜にこびりつく嫌らしい余韻に、私は心の中だけで「放棄なんかしない」と返した。

『：本当は、謝りたかったの』。気付けば、希美は下を向いていた。『でも、謝れなかった。だって、謝ってしまえば、私の嘘が全部、沙耶に知られちゃうから。それで、いつの間にか自然と沙耶を避けるようになった。私はさ、逃げちゃったんだよ』。

『あいつはきつと、怒ったりなんてしなかったよ』

こんな時でも真つ直ぐな鉄二に、私は気持ちよさを抱きながらも、そうじゃないんだよと思っていた。そして現に、希美は首を横に振った。

『そんな問題なんかじゃないんだよ。って言うか、そんなの分かっている』

『だったら、何なんだよ』

『私が、沙耶にそんな子だって思われなくなかったんだよ。ただそれだけなの』

『それって、どういう…』

『鉄二には分かんないのかもね。けど、多分、沙耶なら分かってくれたよ。だからこそ、あの子も私に嘘を吐いたんだろうから。それでまた、私に嘘を吐いているって事を絶対に気付かれないようにしてた。何も無かった顔をして、本当に本音だけで私と付き合っ

るんだって、私達の間には嘘や誤魔化しなんて一つもないんだって、そんな風に振る舞ってた』

『要するに、見せかけの友情だったって事か』

僅かに悲しそうな気配を見せた鉄二に対して、希美はあっさり即答した。『違うよ。逆だよ』と。

『逆？』

『私は、ずっと友達のままだったの。だって、私は沙耶がとっても大好きだから。それで、きっとあの子もそう思ってくれた。だから、こんなことになっちゃったんじゃない』

『：正直さ、あんま良く分からねえよ』

『だろうね。鉄二は、男だから』

『友達に男とか女とか、そんなの関係無いだろ』

『関係あるよ。大ありだよ。女の友情は、男の友情よりもずっと嘘を嫌うし、そのくせ絶対嘘が必要だったりするんだよ』

『それって、結局はまともに向き合うのが恐くて言い訳してるだけじゃないのかよ』

鉄二の指摘は、正論なのだろうと思った。同時に平然とそんなことを言える彼だからこそ、私も希美も好きになったのだと想った。だけど私は、そしてきつと希美もまた、そんな正論だけではどうしようもなくなってしまおう、色んな感情がぐちゃぐちゃに絡まり合っ

て身動きが取れない時だって現実には確かにあることを、知っている。
いや、それはおそらく鉄二だって、内容の詳細こそ違えど、本質的にはある程度似た感情を抱いていたはずなのだ。

『って言うかさ、偉そうな事を言ってたって、鉄二だって、私達との関係の中に男と女を持ち込んだじゃない』

その証拠に、希美がそう言った時、鉄二は簡単に口ごもってしまったのだろうか。

『ねえ、鉄二。正直に答えてよ』

『：何だよ』

『どうして、私と付き合ってくれたの』

『それはお前がー』

『私が告白したから、なんて、そんなの狡いよ』

『希美：』

『ねえ、教えてよ鉄二。あなたは どうして、私の告白を受け入れてくれたの。沙耶に振られて、とりあえず女が欲しかったから？それとも、私が沙耶の友達だったから？私と付き合っていたら、沙耶の近くにいられると考えたとか？』

果たして、鉄二は答えなかった。何かを言おうと、懸命に考えている事だけはありありと伝わってきた。それが余計に辛かった。

待ちきれなくなったのは希美だった。『じゃあさ、これだけ教えて』。

そして希美は相変わらざるの奇怪な笑みを浮かべて、『もしもさ、沙耶がいなくて、最初から私だけと出会っていたら、鉄二は私を好きになってくれたかな』と問うた。

ややあつて鉄二が返した答は、『：そんなこと、考えた事もないから、分からないよ』だった。

それを聞いて、ほんの一瞬、希美の表情が自然なものになった。それから直後に、心から傷ついていると分かるものへ変わった。私には、希美の気持ちが痛いくらいに分かる気がした。

『鉄二は優しいね。正直だし、本当に格好良いと思う』

『それは、その、何て言うか』

『でも、残酷だよ』

『……………』

私はふと、傍らに立つ男に聞いてやりたくなかった。誰かを傷つける嘘を否定するのなら、こんな時、何と答えてやれば相手を傷つけずに済むのかと。それを知っていたなら、私も希美も、鉄二だって、最初からもっと上手く互いに付き合えていたはずなのに。

黙り込んでしまった鉄二に対して、希美が『こんな大変な時にする話じゃないかも知れないけど』と前置きをしてから、告げた。『私と、別れて』と。

私は我知らず「そんなの駄目だよ」と口から漏らしていた、希美に届くはずもなかったのに。

『俺の事、嫌いなのかよ』

『好きだよ。でも、そんなことはもう関係ないのよ』

『何でだよ』

鉄二の硬い問いかけに、希美は現在進行形で深く傷ついていると分かる眼差しをしながら、それでもそれを彼から背けなかった。

『今さら、あなたと別れた所で、私が沙耶を傷つけた最低な女だって事実には変わりはないけど。あなたと付き合っている限り、私は私をこの先もずっと許せないままだろうから。だから、別れて』

希美は真剣だった。鉄二にもそれが分かっていたのだろう、彼はもう『何で』とは口にしなかった。納得したくないと思っっているのは明らかだったけれど、納得しないといけないのだと諦めようとしているのもまた、間違いなさそうだった。

実を言えば、私は驚いていた。まさか、あの子がこんなにも強く自らの想いを他人に言えるだなんて、思ってもいなかった。いつもいつも、私の後ろに隠れている希美を守って上げているのは自分だったという考えが、急にあやふやな幻想に過ぎなかった気がしてきた。

もしかしたら私もまた、あの子に背中を見守られていたのだろうか。もしもそうだとすれば、私がいつでも強くいられたのは、あの子が常に後ろにいてくれると信じていたからなのだろうか。

「気の毒な話だね」

と、そこで唐突に映像は停止し、私は憐れむように言ってくる男を振り向いた。

「結局、君の嘘のせいだ、彼女も、彼も、みんなが傷つく羽目に陥ったんだ」。責めている風では無いけれど、動かない画面を見上げたまま語るその口調は、易々とこちらの胸を抉ってくるものだった。

「今回の君の事故、もしくは自殺は、きっかけに過ぎないよ。だって、彼らはもうとつくに、それぞれの心に痛みを抱えていたんだから」

私は、黙って男の横顔を見つめた。それはやっばりぼやけていて、輪郭さえも曖昧だっ

たけれど、何故だかどれだけ眺めていても気持ち悪さは湧いてこなかった。

「彼女は君を傷つけてしまったと罪の意識を抱えていたし、彼は彼で君と彼女への想いの狭間で苦しんでいた」

「鉄二は、そんな適当な男じゃないよ」。反発するように口を衝いて出た言葉は、けれどまるで他人の意見じみて私の耳に聞こえていた。

「だろうね、彼はいい男そうだし。彼女とも真剣に付き合っていたんだろう。でも、だからこそ悩みもしたんじゃないのかな。自分を振った女の事などさっさと斬り捨てて、ただ自分を好いてくれていた彼女の事だけを気に掛けてやる事も出来ただろうし、そうでなくともその場しのぎに『今はお前だけを愛している』だとか何とか言っただけでやることも出来ただろうに」

男の言っている事は、正しいのだろう。決して受け入れたくないけれど、でも、間違っているとも思えない。だけど、そうであるのならこそ…。

「全く、素晴らしい生き方だ」

「一体どうすれば良かったって言うのよ」

間髪を容れず問いかけた私を、男は緩慢な仕草で振り返ってから、「と言うと?」。私は一気に圧迫感の増した眼球に怯みそうになりながらも、そのまま視線を外さずに言った。「私の行動が間違っていたって言うんなら、じゃあどうすれば良かったのよ」。

「さあね」

「さあねって…。ふざけないでよ」

「私の役目は、此処で君を審査する事だからね。君に答を与える事では無いのだよ」

「そんなこと言って、本当はあんた達にだって正解なんか分かってないだけじゃないのっ」

「かも知れないね」

「何よ、それ…」

あまりと言えば無責任な返答に、怒りも通り越して呆れてしまった。

「さて、審査を続けようか」。男に悪びれている気配など欠片も無かった。

「それでは、これから君に質問をするから、出来る限り正直に答えてくれ賜え。どうしても嫌なら答えなくても構わないけれど、あまり賢明な判断とは言えないかな。カンニングの手助けをするみたいで、少しばかり気が引けるのだけれど、敢えて先に言っておけば、君はかなりぎりぎりの所に立っている状態だから」

やがて男は、そんな嬉しくもない忠告をしてきた後で、こう聞いてきた。

「君のあれは果たして、自殺だったのか、それとも事故だったのか、一体どっちなんだろうか」

ほんの刹那、問われている意味を理解出来なかった。いや、もっと正確に言えば、どうして今さらそんなことを問うてくるのか、目的が分からなかった。

「…え、それって、私に聞いているの」

「当たり前だろう。だって、真相は君にしか分からないのだからね」

「……………」

「それとも、君にも分からないのかな。それならそれで、こちらとしては構わないのだけれど」

言外に、「ならば、君の審査はこれで終わりだ」と告げてきている男の声を聞き流しつ

つ、私は突如として速くなってきた心臓の鼓動を感じながら、考えていた。

私は一体、自殺と事故のどちらが原因で、この境目へやって来たのだろうか。

結論は即座に出してくる、そう思われた。勿論、ただの事故よと。

けれど実際は、もしかしたら、と言う不安をぬぐいきれず、すぐに答える事など出来なかった。唯一、自信を持てた事は、適当に嘘を吐いたり、不確かな気持ちを抱いたままで回答してしまうのは、致命的な行為に違いないはずだと言うことだった。

本当に、自殺をしようと考えた事なんて、一度もないはずなのだ。確かに、何もかもが嫌になって、全てを否定してしまいたくなった事は、ある。その度に、そもそも自分は本当は鉄二のことなど好きじゃなかったのだと真剣に思い込もうとしていたのも、事実だ。鉄二と気まづくなり、いつしか希美とも距離を置いていて、気付けば一人で放課後の街を家に帰る気にもなれずじぶらぶらとしていた時、ふとした拍子に泣き出してしまいそうになった事は、一度や二度じゃない。朝目が覚めて、学校に行く支度をしている途中でいきなり、このまま部屋に引きこもってしまったって、世界から隔絶されたらどんなに楽だろうか、ひたすらに退廃的な誘惑に負けそうになった事もある。時折、校舎を歩いている時に、視界の端の方に希美や鉄二の、いつそ二人が一緒にいる姿を見かけてしまって、体が勝手に後ろ向きに駆け出してしまっていたり、挙げ句の果てには二人が付き合いたらしいと言う噂を聞いて、良かったと思いたいのにも上手く心を整理出来ずに苛立ちばかりがついてしまっていた瞬間も、思い出そうとすれば容易く脳裏に再現出来るくらいには、決して珍しい事じゃなかった。

だけど、それでも、本気で死んでしまおうだなんて、冗談でも考えたりしなかった。それははずだった。

しかし、しかしだ。あの時の自分も絶対にそうだったと言い切って、本当に大丈夫なのだろうか。私自身でも気付いていないほどの嘘や誤魔化しは、微塵も含まれていないのだろうか。

私は、何度も何度も躊躇しながらも、必死にあの時の事を思い出そうとした。

やがて脳裏に浮かんできたのは、泣きたいくらい切ない光景だった。

あの日、いつものように学校が終わってから、退屈な時間を潰す為に見飽きた街を一人でうろろろしていた私は、そこで偶然にも、もしくは不運にも、希美と鉄二が並んで歩いている場面に遭遇してしまった。

私は突然の事態に、頭がパニックを起こしてその場に凍りついてしまっていた。どうしよう、どんな顔を向ければいいのかのさだろう、話し掛けられたら何と返せばいいのかのさ、色んな思考が私の中でぐるぐるぐる渦巻いていた。

でも、向こうは、こちらに気付いていなかった。希美と鉄二はとても楽しそうで、全身で二人だけの世界に浸っている感じで、少なくとも私の目にはそう映っていて、だから私はずっと外側で一人きり、二人の様子を眺めているしかなかった。

唐突に、邪魔したらいけないと思った。早く、気付かれない内に、立ち去らなければならぬ。…本音は多分、これ以上は見えていたくないと思っただけなのだろう。

そして私は、静かに背を向けて歩き出した、のだと記憶している。ただ、正直に白状すれば、この時に関して、あまり詳しく覚えていないのだけれど。

ぼんやりと、足の動きに任せて歩いていたのは間違いない気がする。何も考えたくなく

て、何かを考えたらあつという間に限界を超えてしまいそうで、だから必死に「空っぽな頭」のイメージで頭を一杯にして、私はろくに前も見ずに歩いていった。

交差点に差し掛かった時も、きつとそうだったのだろうと思う。信号機の色も、眼前の道路を行き交う車の流れも、おそらく情報としては伝わってきていたはずだけれど、その意味を理解する気力が無かったのだろう。

「…そうだよ。やっぱり、私は自殺なんかしていない」

気付けば、私は思考を声に出していた。

「それが、本当に答で良いのかな」

男の確認に、ようやく我に返った私は、改めて「自殺なんか、してない」と告げた。

そうだ。私は決して、死にたいと望んで、わざと道路に飛び込んだりしていない。だって、死にたいと願える余裕さえ、あの時の私には無かったはずなのだから。

「私は自殺したんじゃないやなくて、ただ信号や車に気付かず道路に出ちゃっただけ。あれは、間違いなく事故だったのよ」

確信を込めて言った私に、男は一度だけ「ふむ」と頷くと、何やら考える風にステッキで地面をコツコツと叩いた。

果たして、それは男にとって満足のいく回答だったのかどうか、私に知る術は無かったけれど、不思議なことにあんなにもしつこく残っていた不安は、いつの間にか消えてしまっていた。

「それでは、次の質問だが」。しばらくして、今度はくるりとステッキを肩に載せた男は、反射的に身構えてしまったこちらに対して、やけにのんきな口調で尋ねてきた。

「君は、仮に生と死を選択出来るとして、生きたいのかい？」

心底から、意地の悪い質問だと思った。実際、性悪な男はいよいよその本領を發揮してきた。

「どうせ再び目覚めた所で、辛く寂しい現実が待っているだけだよ。事故の話をしてても、大切な親友は離れていってしまったし、大好きだった男の子は君自らから拒絶してしまった。毎日が楽しいなんて、もうずいぶんと久しく感じていなかったんだろう？」

男は無言を貫いている私に対して、心なしか早口になってきていた。

「本当は、全て何もかも忘れてしまいたかったんじゃないのかな。だけどそれが叶わないから、無理矢理に自分を頑張らせていただけじゃないのかな」

「……………」

「そんな必要は、本当にあつたのだろうか。生きる価値のある人生ならば、生きるべきだけれど、生きる価値を失った人生を、それでも生きる意味が、君にあるのかい？」

私の答は、とっくに決まっていた。

「あんななんか、私の価値を勝手に決められたくないわよ」

今度は男が黙る番だった。

「そりゃ、私はただの高校生だし、特別に自慢出来る事も無いし、頭や要領だってそんなに良くない。でも、あんたが言ったのよ。そんなことは関係無いって。何が命の本質よ。こそこそと、こんな場所から他人を覗き見して適当な事を言うだけのあんたに、私の本質なんて分かりっこないわよ」

遂に言っちゃったと、すっきりした。直後に言い過ぎたかなとかすかに恐くなったけれ

ど、後悔はしなかった。だって、私はただ質問に答えているだけなのだから。

「お願いだから、もう一度、私を帰して。希美や鉄二や、他のみんなに会わせて」

そして私は、おそらく生まれて初めて、ただひたすら素直に頭を下げた、深々と。「どうか、お願いします」。

男は何も応えなかった。

だから私は「お願いします」と繰り返した。どんなにみっともなくとも構わない、再び生きられるのなら、私は何度でも懇願を続けるつもりだった。

なぜなら、私はどうしても、再び希美や鉄二に会いたかったからだ。私が二人を傷つけてしまった。二人はとても傷ついていた。それなのに私のことを考えてくれてもいた。そんな事実を知らされて、今さら諦められるわけがなかった。

どうするべきだったのか、何が最良で最善の行動だったのか、そんな事はやっぱり分かっていないままだったとしても、私は絶対にもう一度、ちゃんと二人と向き合わなければならぬのだ。喩えこの体や外見がどんな状態になっても、絶対にも、絶対に。

だって、私は今でも、二人のことが大好きなのだから。それが、私にとっての紛れもない本心なのだ。

「かなり、微妙な所ではあったんだがね」

と、不意に男の苦笑じみた声が聞こえてきて、私は頭を上げた。

「いや、むしろ残念な結果に近かったんだけど」

「そんなっ」

「しかし、傷つけられた当人達が、君の帰りを願っているのだから、それは評価の対象として入れておくべきなのだろうね。誰かに望まれる生き方をしてきた人間という者は、つまり『生きる価値のある人間』なのだから」

「え、じゃあ…」

この時、私は一体どんな顔をしていたのだろうか。そしてまた、男はぼかしの向こうでどんな表情を浮かべていたのだろうか。

それはもしかすると、同じ様なものであったのかも知れない。反対に、まるで対照的なものであったのかも知れない。

実のところ、私には分からないままだったのだけれど、あまり不満はなかった。その気になれば、意外と簡単に想像してしまえそうな感じがしていた。

「さて、と。そろそろ、頃合いのようだ」

男がお伽話の魔法使いよろしく軽くステッキを振ると、宙に固定されていた画面が消えて、さらに振ると、代わりに今度はどこからともなく二枚の板が現れた。それは、私にとって日常的すぎて新鮮味の欠片もない、学校の教室の入り口にある引き戸そのものだった。

「行くと良いよ」

男が言った。名残惜しんでいる気配は皆無だった。

「ありがとう」

私は素直に札を告げた。「おやおや、現金なものだ」と男がからかいめいた口調で言ってきたけれど、逆らったりしなかった。「…ふむ」と、男が仄かに気まずそうな呟きを漏らした。それはちよつとだけ、可愛らしかった。

「それじゃあ、私は行くから」

梓もないのに倒れもせず直立している引き戸に、普段通りに手を伸ばすと、感触まで本物と同じだった。

「今度はもう少し、素直に生きると良いよ。女の子は、若い内は素直なのが一番だ」

「何それ、嫌味？って言うか、若くない人が聞いたら怒るわよ？」

「平然と自分を『若くない人』から外して考えられる事こそ、きつと若さの特権だろうね」
「やっぱり嫌味じゃない。最後の最後まで、本当に最低よね。鉄二とは大違い。そんなじゃ一生モテないわよ」

「これはこれは、手厳しいね」

「それが嫌なんだったら、今度来る人には一度くらい親切にして上げる事ね」

半ば本気でそう言ってやると、男はまたしても「ふむ」と呟いて、シルクハットを左右に揺らした。

私はその態度に、どうせこちらの言う事なんて聞かないんだろうなどと、呆れた印象を抱きながら引き戸を開けた。空間を四角く切り取られたみたいなそこは、やはり辺りと同じく真っ白だったけれど、それでも此処とは違う世界に通じているのだと直感出来るものだった。

そして私は、そこへ一歩、足を踏み入れた。地面さえ見えない空間に、けれど足が着いていると言う感覚は、とてつもなく違和感のあるもので、私は早々に目を閉じた。

と、その時だ。

「それじゃあ、最後に一つくらい、サービスをしておこうかな」

不意に背後から男の面白がっている風な声が聞こえてきて、私は思わず足を止めて振り返った。

だけど視界はもう純白に染まってしまっていて、男の姿どころか、先ほどまで立っていた場所さえ判然とせず：。

やがて私は男の真意を教えられぬまま、眩しい白の中へと意識を溶かしていった。

「沙耶っ」

いきなり名前を呼ばれて、私は反射的に足を止めた。

直後、すぐ目の前をトラックの車体が走り抜けていって、背筋が凍った。もしもあのまま進んでいたなら、今頃自分は酷い目に遭っていただろう。

「…あれ。私、何で」

と、そこでようやく私は我に返った。「…此処って、何処？」。てっきり病院のベッドの上で目覚めるものとはばかり思っていたのに、周りは明らかに屋外で、初夏の眩しい日差しがさんさんと肌を焼いてくる。当然ながら、そこには傷痕どころか小さなかさぶた一つ無い。

「え、まさか、この場所って…」

そして私は遅まきながら理解する。つまり、自分が今いる場所こそ、あの悲惨な事故の

起こった現場なのだと。ただ、肝心の事故の内容に関してまでは、今ひとつはつきりと思い出せなかったけれど。

何だか奇妙な感覚だった。そう、言うなれば、長い眠りから覚めた時のような。確かに夢を見ていたことは覚えていて、その内容や雰囲気もまだ頭の中に残っている気がするのに、いざ思い浮かべようとすると薄もやが広がるみたいにぼやけていって、あつという間に曖昧なものへと変わってしまう。そうして結局、きちんと中身を知られぬまま、忘れてしまうのだ。

「沙耶っ」

その時だ、またしても背後から私を呼ぶ声が聞こえてきて、思わず体が固まった。すぐ後ろにまで、誰かが走ってきた気配を感じた。

「沙耶…」

三度、私の名を、彼女は呼んだ。

「…希美」

私はやっと、ゆっくりとだけれど、振り返ることが出来た。少し遅れて、鉄二が駆けてきているのが見えた。彼はとても心配そうな、でも、かすかに嬉しそうな、微妙な表情を浮かべていた。

「沙耶、あの、私…」

信号が青に変わり、周りの空気が行き交う人々によって攪拌される中、それでも私と希美はその場に立ったまま、私達の間だけ空気の比重が違うみたいだった。

「あの、私ね」

希美は、今にも泣き出してしまいそうな顔をしているくせに、声だつて早くも震えているくせに、何かを必死に伝えようとしていた。

そして私には、何故だか、分かっていた。具体的な内容がと言うことではなく、彼女が今、どんな気持ちで私の前に立っているのかと言うことが、だ。どんな気持ちで、私の事を追いかけてきてくれたのが。

ほんの二ヶ月程度、こんな風にまともに見つめ合う機会を失っていたのは、たったそれだけの時間に過ぎないのに、さながら数年ぶりに再会した気分だった。追いついてきた鉄二は、少しだけ距離を取って、私達を見つめていた。

「あのね、私ずっと、本当は沙耶にずっと」

と、希美が遂に意を決して何かを語ろうとしてきた、その瞬間。多分、彼女本人は自覚していなかったのだろうけれど、丁寧に化粧を施されていた瞳から一滴、涙が落ちた。するとそれは透明な糸でも繋がっていたみたいに、次々に新しい涙を引っ張り出してきて、せつかくいつもよりも遙かに綺麗に整えられていた希美の瞳が、見る見るうちに無惨なものへと成り果てていった。

気付けば、私は掴んでいたカバンを放り捨て、希美を抱き締めていた、それも思い切り。それから、嗚咽のせいでもうほとんど何を言っているのか分からなくなってきている希美に、それなのに言葉を止めようとしないうちに彼女に、「もう良いからっ」と叫んだ。その声は、我ながら情けないほどに鼻声で、この時になって初めて、自分も泣いているのだと知った。

「もう良いから、ね。大丈夫だから。ちゃんと、分かっているから」

何が良いのか、何が大丈夫なのか、何を分かっているのか、改めて口で説明しろと言わ

れたって、きつと上手くは出来なかっただろうけれど。でも、それは私にとって偽り無い心情の吐露だった。

「もう大丈夫だから。私には、ちゃんと分かっているから。だから、もう大丈夫だから」
大して身長も違わない私に必死にしがみつき、赤ん坊みたいに泣き始めた希美を、私もまた力一杯に抱き締めながら、おそらく最早まともな言葉になっっていないだろう声で何度も何度もそう繰り返した。

私達は、ずいぶんと長い間、そこで抱き合っていた。私がそろそろ体を離そうかと思つて腕の力を抜くと、その分だけ背中に回されている希美の腕に力がこもった。その逆もまた然りで、彼女の腕から力が抜けそうになると、途端に寂しい気持ち湧いてきて、私は反射的に腕に力を込めてしまっていた。

だけど、徐々にお互いに落ち着いてきて、そうすると今度は一気に自分達がどれほど恥ずかしい格好を公衆の面前で晒しているのかと言うことに意識が向いて、やがて私達はどちらからともなく体を離れた。でも、手だけは繋いだままだった。いい歳をして幼子じみた真似だと分かっていたけれど、振りほどく気には到底ならなかった。

希美は笑っていた。化粧は崩れ、涙の跡が幾重にも残る顔で、かすかに恥ずかしそうに、けれど楽しそうに笑っていた。

それを正面から見てしまった私は、堪えきれずに「ぶっさいくな顔っ」と言つて吹き出した。

すると即座に希美は言い返してきた。「沙耶だって、もの凄くブスだし」。

何て失礼な奴だと思った。

「今の希美よりはマシだし」

「絶対に沙耶の方が酷いし」

「だってあんた、目の周り真っ黒だし」

「沙耶なんか鼻水出てるし」

「なっ…」

反射的に鼻を手の甲でぬぐう。手を繋いだままだったので、僅かに希美が嫌そうな顔をしたけれど、それがまたむかついた。

これは早急に決着を付けなければならぬと確信した、女のプライドに賭けて。

「じゃあさ、鉄二に決めて貰おうじゃない」

「良いわよ」と、希美に異論は無さそうだった。

そこで私達は一卵性の双子よろしく、異口同音に「で、どっちが良い？」。

果たして、私のカバンを拾って持ってくれていた鉄二の返答は、「いや、どっちも酷いし」だった。本当に女心の分からない奴だと呆れてしまった。

「まあ、良いわ。そもそも鉄二なんか判断して貰おうとしたのが間違いだっだし」
私の言葉に、希美は可愛らしく「そうだよ、そうだよ」と頷いてくる。

「希美は良い子ねえ」。両手がふさがっているから、頭を撫でる代わりに額同士をくっつけてぐりぐりとしてやると、希美は嬉しそうに笑い声を上げた。「お前らって、二人揃うとマジで無茶苦茶だよな」などと、何やら空気を読まない発言も聞こえてきたけれど、言うまでもなく無視してやった。周囲からの視線なんて、とつくに気にならなくなっていた。

いつの間にか、私達は前のような三人に戻っていた。

けれど、それは決して、前と同じ関係では無いのだ。そしていずれは、そのことに触れなければならぬ。本当に、これからも三人でやっていきたいなら。

束の間、私達はどうでも良い話を、思い付いた端から口にしていく。それは全く実も無い内容ばかりで、きつと次の日になればさっぱり忘れてしまっているだろうものばかりだった。でも、そんな軽い話を気楽に交わしている事実だけは、きつと一生忘れないんだろうと思った。

少しずつ、私達の間から口数が減っていった。やがて私達は、鉄二を頂点にした二等辺三角形みたいな状態で、固まっていた。私と希美、互いに繋がれた腕が、それを支える底辺だ。

誰よりも先に何かを言おうとして、出来ずに口を閉ざしたのは、希美だった。

そんな彼女を見て、直後に口火を切ろうとしたのは、鉄二だった。

だけど、その寸前で最も早く声を発したのは、私だった。

「あのね鉄二っ」

言葉を急いだせいもあってか、考えていたよりもだいぶと厳しい口調になってしまったけれど、それならそれで都合が良かった。

私は鉄二の目を見据えて、言った。「希美を泣かしたら、あんたをこの世で一番不幸にしてやるからね」。希美の手が、ぎゅつと私の手を握ってきた。

「どんな脅し文句だよ」。苦笑混じりに呟いた鉄二は、しかし真っ直ぐにこちらを見返してきていた。

そして彼は、やや間を空けてから、「言われなくても、俺、マジだし」と言った。

ああ、やっぱり鉄二は鉄二だと、締め付けられそうになった胸が、一転して軽くなった。気を抜いた途端にまた泣き出してしまいそうになって、でも今なら泣いても良いかと思つて顔から力を抜いたら、泣く代わりに笑つてしまった。

「ふん、何を格好付けてんのよ」。だからこそ、こんな憎まれ口も、前みたいに自然と紡ぐことが出来たのだろう。

それはまた同時に、希美に対しても。

「沙耶…。その、明日から、また…」

「うん。明日っから、また一緒に帰ろうね」

私の言葉に、明るい表情で頷いてくれた希美に、やっぱりこの子は私が守らないと言う強い母性が芽生えてきてしまつて、私は改めて「鉄二にちよつとでも嫌な事をされたら、すぐに言いなさいね」と、彼に聞こえるように言った。

鉄二はさながら小姑を見る婿養子じみた顔をしていたけれど、結局は溜息を吐いただけで反論してこなかった。そんな彼に、希美は「沙耶は、私の味方だから」と勝ち誇った様子で告げていた。

それから私達は歩き出した。行き先はどうするのか、幾つか鉄二からの案も出たのだけれど、ともかくにも女子二人の顔をどうにかするのが先決だったから、化粧室の綺麗な近くのファストフード店に向かうことにした。

「お前らつてさ、本気で我が儘だよな」

呆れた口調で言ってくる鉄二に、「それを叶えるのが男でしょ」と即答しながら、私は

笑うという行為がこんなにも簡単だった事を、穏やかな気持ちで思い出していた。

〈了〉